

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第57集

高師町遺跡群

高師町遺跡II

takashimachi

長野県佐久市高師町遺跡II発掘調査報告書

1997. 3

佐久市教育委員会
佐久市農業協同組合

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第57集

高師町遺跡群

高師町遺跡II

takashimachi

長野県佐久市高師町遺跡II発掘調査報告書

1997. 3

佐久市教育委員会
佐久市農業協同組合

例 言

- 1 本書は、平成7年度から平成8年度にわたって調査した、長野県佐久市大字新子田（なほこま）に所在する高師町遺跡群高師町遺跡IIの調査報告書である。

遺 跡 名 高師町遺跡群高師町遺跡II

所 在 地 長野県佐久市大字新子田字高師町1387-4

調 査 面 積 1800㎡（全体面積9097.35㎡）

開発主体者 佐久市農業協同組合

開発事業名 葬祭センターおよび多目的ホール建設

- 2 本調査は、佐久市農業協同組合の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、林幸彦（試掘）、羽毛田卓也（本調査）を担当者とし、地元の皆様をはじめ多数の方の協力を得て実施した。
- 4 本遺跡に関わるすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
- 5 本書作成の主たる作業分組は、以下のとおりである。

遺物・遺構実測 羽毛田卓也、神津ツネヨ、花岡美津子

遺物・遺構トレス、写真、執筆・編集 羽毛田卓也

凡 例

- 1 遺跡の略称 ATMII
- 2 遺構の略称 H→平安時代の竪穴住居址 Ta→中世の竪穴遺構
F→（ほったてばしらたてものし）竪立柱建物址 D→（どごう）土坑
M→溝状遺構
- 3 遺構の縮尺は図中にスケールを付したので参照されたい。
- 4 遺構・遺物に関わる凡例は、実測図中において説明を加えた。
- 5 遺構の海拔標高は、各遺構ごとに統一し、測量基準ライン上に明記した。
- 6 写真図版・表中の番号（例22-3）は押図番号（例第22図3番）と対応する。
- 7 土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修1987年度版『新版標準土色帖』の表示に基づいた。
- 8 写真図版中の遺物の縮尺は石鏡・古銭を除き1/3に統一した。

目 次

例言 凡例 目次

第 I 章 発掘調査の経緯……………	1		
1 調査に至る動機……………	1	2 調査の概要……………	3
3 調査の体制……………	3	4 調査日誌……………	4
第 II 章 遺跡の位置と環境……………	6		
1 遺跡の自然的環境……………	6	2 遺跡の歴史的環境……………	7
第 III 章 遺構と遺物……………	15		
1 竪穴住居址……………	15		
H 1 号住居址……………	15	H 2 号住居址……………	19
H 3 号住居址……………	22	H 4 号住居址……………	24
2 掘立柱建物址……………	30		
F 1 号掘立柱建物址……………	30	F 2 号掘立柱建物址……………	31
F 3 号掘立柱建物址……………	32	F 4 号掘立柱建物址……………	32
F 5 号掘立柱建物址……………	33	F 6 号掘立柱建物址……………	34
F 7 号掘立柱建物址……………	34	F 8 号掘立柱建物址……………	35
3 土倉状竪穴遺構……………	35		
Ta 1 号・Ta 4 号			
土倉状竪穴遺構……………	35	Ta 2 号土倉状竪穴遺構……………	36
Ta 3 号土倉状竪穴遺構……………	37	Ta 5 号土倉状竪穴遺構……………	37
4 土坑……………	38		
D 1 号土坑……………	38	D 2 号土坑……………	38
D 3 号土坑……………	39	D 4 号土坑……………	39
5 溝状遺構……………	40		
M 1 号溝状遺構……………	40		

写真図版

第 I 章 発掘調査の経緯

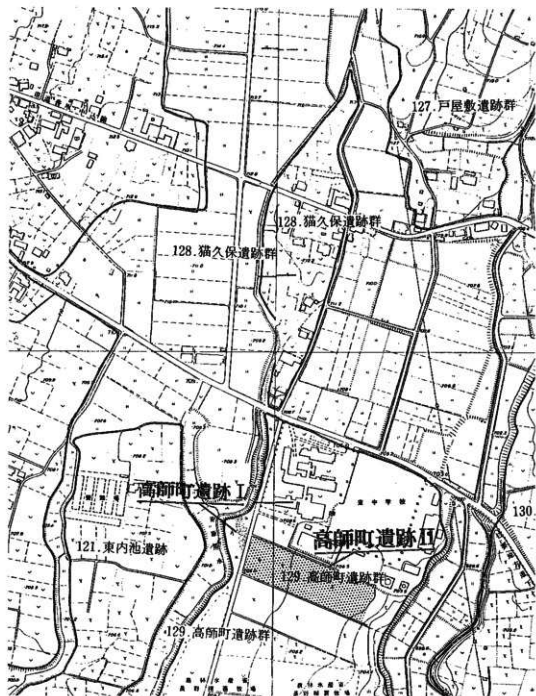
1 調査に至る動機

高師町遺跡群は、佐久市大字新子田に所在し、南北に伸びる田切地形(帯状低地と帯状台地の交互地形)の帯状台地上標高701mから711mに展開する平安時代の遺跡である。今回調査した高師町遺跡Ⅱは、本遺跡群中央北側の標高709m内外を測る台地中央に位置する。

今回、佐久市農業協同組合が行う葬祭センター・多目的ホール建設に伴い、佐久市農業協同組合と佐久市教育委員会とで協議の結果、試掘調査により遺構の確認作業を行うこととなった。試掘調査により対象地全体に平安時代と中世の遺構が広がっていることが判明し、再度両者で協議を行った。その結果、駐車場については盛り土をすることとし、建物部分と削平部分については佐久市農業協同組合より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査を行う運びとなった。



第1図 高師町遺跡群高師町Ⅱ遺跡位置図(1:25,000)



第2図 高師町遺跡位置図(1:5,000)

2 調査の概要

平成7年度 試掘調査

調査面積	9,097.35㎡
調査期間	平成7年6月14日から平成7年8月31日
検出遺構	平安時代の竪穴住居址 20軒
	竪立柱建物址 11棟
	平安時代・中世の土坑 46基
	溝状遺構 6条

平成7年度 本調査

調査面積	約1,800㎡
調査期間	平成7年11月21日から平成7年11月30日
調査遺構	平安時代前期の竪穴住居址 4軒
	平安時代・中世の土坑 4基
	平安時代・中世の竪立柱建物址 8棟
	中世の土倉状竪穴遺構 5軒
	溝状遺構 1条
整理調査	平成8年1月8日から平成8年3月31日

平成8年度 整理調査

調査期間	平成8年11月25日から平成9年3月31日
------	-----------------------

3 調査の体制

平成7年度

事務局	佐久市教育委員会埋蔵文化財課
教育長	大井季夫（平成7年6月退任） 依田英夫（平成7年7月就任）
教育次長	市川 源
埋蔵文化財課長	戸塚 満
管理係長	谷津恭子（平成7年11月退任）
管理係	田村和広
埋蔵文化財係長	大塚達夫

埋蔵文化財係	林幸彦、三石宗一、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也 富沢一明、上原学
調査担当者	羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子

平成8年度

事務局	佐久市教育委員会埋蔵文化財課
教育長	依田英夫
教育次長	市川 源
埋蔵文化財課長	北沢元平
管理係長	棚沢慶子
管理係	田村和広
埋蔵文化財係長	大塚達夫
埋蔵文化財係	林幸彦、三石宗一、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也 富沢一明、上原学
調査担当者	羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子

平成7年度から平成8年度

調査員	浅沼ノブ江、荒井利男、飯沢つや子、磯貝はな、江原富子、遠藤しずか 柏原松枝、川多アヤ子、神津ツネヨ、神津よしの、小須田サクエ、白井おくに 並木ことみ、花岡美津子、花里八重子、細萱ミスズ、桃井もとめ、山口丑男
-----	---

4 調査日誌

平成7年6月14日～8月31日

試掘調査

平成7年11月17日

機器材の搬入など

平成7年11月21日～

本調査開始 プランの確認作業など

平成7年11月21日～

遺構の掘り下げ開始

平成7年11月21日～

実測作業開始 写真撮影開始

平成7年11月29日

遺構の掘り下げ終了

平成7年11月30日

実測・写真撮影終了

平成7年12月1日

機器材の搬出

平成8年1月8日～3月31日

土器等水洗いおよび遺物の注記

平成8年11月18日～12月25日

実測図面の修正

平成8年12月2日～12月25日

土器の復元、石器・土器の実測

平成8年12月4日～平成9年3月31日

遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影

本文の原稿執筆および編集作業

第II章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の自然的環境

佐久平は、北に浅間山を主とする三国山脈の南端峰群、東から南に関東山地から連なる山々である佐久山地、西から南に八ヶ岳連峰と、四方を山々に囲まれた盆地で、長野県の中央東端に位置する。佐久平全体の平坦部の標高は600mから1000mを測り、佐久市はこの佐久平のほぼ中央に位置し、平坦部の標高は620mから770mを測る。また北側で軽井沢町・御代田町・小諸市と、西側で浅科村・望月町と、南側で茅野市・佐久町・白田町と、東側で群馬県下仁田町・南牧村と接している。

佐久市の中央部を佐久地方南端の甲武信ヶ岳に源を発する千曲川が北進し、浅間山に源を発する湯川・濁川、佐久山地に源を発する霞川・香坂川・志賀川・清津川・田子川・瀬早川・八重久保川、八ヶ岳に源を発する石突川・片貝川・大沢川・中沢川・小宮山川・倉沢川・宮川などの小河川がそれに向かって集まり、大小の扇状地や河岸段丘を形成している。佐久山地の八風山や寄石山・物見山・兜岩山・熊倉峰・荒船山は、石英安山岩類や溶結凝灰岩類・ガラス質の荒船安山岩類により形成されている。これらの山の基盤には第三紀層・中生層や古生層が広がっているとされている。内山の初谷層は中生層で内山層は第三紀層である。また兜岩層・駒込層・八重久保層は第三紀層である。

浅間山は今から1万4千年から1万1千年前にかけて2回にわたる大規模な噴火をし、軽石流(火砕流)を発生させている。平成4年度の寄山遺跡の調査で軽石流により埋没した林が発見された。発見された木々は立ったままの状態で、発見面から根元までは7mの深さであった。この地は軽石流の最南東端にあたり、斜面に乗り上げる形で堆積している。そのため木々は倒れることなく立ったまま埋まったと想定される。樹種はほとんどが針葉樹のトウヒ属であり、現在より冷涼な気候であったことがうかがえる。佐久平の北側は、浅間山第1軽石流の火山噴出物によって厚く覆われ、雄大な山麓を形成している。この山麓は火山噴出物の性格上水の各種作用を受けやすく、大小様々な峽谷や「田切り地形」と呼ばれる帯状台地と帯状低地の交互地形が見られる。今回調査した高師町遺跡群高師町遺跡IIは、佐久市のほぼ中央、長野牧場北側の南北に伸びる2本の田切り低地に挟まれた帯状台地上に展開している。この湯川東側の平尾・安原・新子田・伊勢林・中込中央区には何本もの田切りが南下している。これらの田切りは浅間軽石流により塞き止められた湯川が氾濫した際に形成されたと考えられる。



第3図 佐久市・高師町遺跡II位置図

2 遺跡の歴史的環境

今回調査した高師町遺跡群高師町遺跡IIの周辺には、縄文時代から中世にかけての遺跡や遺跡群が密集している。高師町遺跡群では昭和61年度に道路建設の際に調査され、平安時代の竪穴式遺構1軒・特殊遺構2基、時代不明の溝2条・土坑3基・柱穴1基などが検出され、特殊遺構を中心に5個体の墨書土器が出土している。今回高師町遺跡IIで検出されたおもな遺構は、平安時代前期の住居址と掘立柱建物址と中世の竪穴式遺構(土倉状遺構)と掘立柱建物址である。また主な遺物は平安時代の坏・皿・甕などで、坏・皿の中には墨書されているものが何点か見られる。また皇朝十二銭のひとつ富壽神寶とよひくしんほうが住居址から出土している。試掘調査の全体図を見ると、整然と並んだ掘立柱建物址を取り囲むように住居址が並んでいることがわかる。この掘立柱建物址群を集落の中心と考えると、前回の調査で検出された特殊遺構は調査報告で想定されているように集落の外れの祭祀に関係した遺構であった可能性が高い。

この地域の平安時代から中世にかけての集落は田切り低地に挟まれた帯状台地に広範囲に展開している。本遺跡隣の田切り低地を挟んだ西側の東内池遺跡(35)では宅地造成の際の試掘調査で平安時代と中世の集落が確認されている。さらにその西側の蛇塚B遺跡群(34)では数度に渡る調査で平安時代の大集落が検出されている。また田切り低地を挟んだ東側の筒畑遺跡群田端遺跡(28)では奈良・平安時代の集落が、戸坂遺跡(27)では平安時代の集落が検出されている。いずれも黒書土器を伴う時期の集落で、戸坂遺跡などは多量の黒書土器を出土した集落として著名である。この安原・新子田地域には平安時代の前期から中期にかけてピークを持つ大きくひとつにまとまりそうな集落群が形成されていたと考えられる。このような単一時期の大集落は佐久市域では貴重な存在である。今後付近の調査例が増加すればもう少し明確な位置付けができるものと考えられ、平安時代の集落群を考える上で興味深い地域である。

その他周辺の各遺跡および時代等の詳細は第4図と第1表を参照されたい。



第4図 周辺遺跡分布図(1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	所在地	備考
1	下小平遺跡	弥生～平安	岩村田	昭和55年度調査
2	上小平遺跡	平安	岩村田	
3	棧敷遺跡	平安	安原	
4	棧敷古墳	古墳	安原	
5	西大久保遺跡群	縄文～平安	上平尾・下平尾	昭和61・62年度調査
6	東大久保遺跡群	縄文～平安	上平尾・下平尾	昭和62年度調査
7	戸屋敷遺跡群	平安	安原・下平尾	
8	東村遺跡群	縄文～中世	下平尾	
9	木田橋遺跡	平安	下平尾	
10	万助久保遺跡	平安	下平尾	
11	丸山古墳群 丸山遺跡	古墳 縄文～中世	下平尾 下平尾	昭和62年度調査 昭和62年度調査
12	大角遺跡	弥生～平安	下平尾	
13	燕城跡	中世	安原	
14	筏室遺跡群	古墳～平安	安原	
15	安原大塚古墳	古墳	安原	
16	岩久保遺跡	縄文・平安	安原	
17	宿上屋敷遺跡	古墳・平安	安原	昭和61年度調査
18	光明寺遺跡	平安・中世	安原	昭和61年度調査
19	入大久保古墳群	古墳	香坂	
20	東大久保遺跡	平安	香坂	
21	楠現平遺跡	縄文・平安・中世	新子田	平成6年度調査
22	池端遺跡 池端城跡	縄文～中世 中世	新子田 新子田	平成7年度調査 平成7年度調査
23	境内遺跡	弥生～平安	新子田	
24	氏神古墳群	古墳	新子田	
25	新子田神明の木遺跡	縄文～平安	新子田	
26	浅井城跡	中世	新子田	
27	戸坂遺跡	弥生～中世	新子田	昭和46年度調査

28	筒畑遺跡群	縄文・平安	新子田・安原	昭和60年度調査
29	高師町遺跡群	平安～中世	新子田	昭和61年度調査
30	高師町遺跡Ⅱ	平安～中世	新子田	今回調査
31	猫久保遺跡群	平安	安原	昭和60年度調査
32	蛇塚A遺跡群	縄文・平安	安原	平成8年度調査
33	蛇塚古墳群	古墳	安原	平成8年度調査
34	蛇塚B遺跡群	平安	新子田	昭和54・58、平成3・7年度調査
35	東内池遺跡	平安～中世	新子田	昭和60年度調査
36	小池遺跡	弥生～平安	新子田	
37	野馬窪古墳	古墳	猿久保	
38	野馬窪遺跡群	弥生～平安	猿久保	昭和56年度調査

佐久市東地区社会体育館

佐久市立東中学校 プール

佐久市市立東中学校 テニスコート

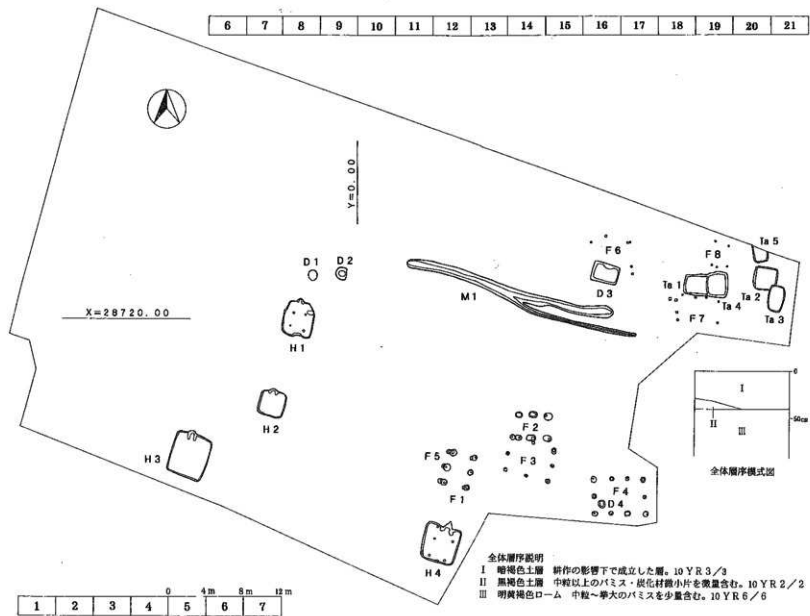


市道39-37号線

至 長野牧場

佐久市農業協同組合 花卉集荷施設

第5回 試掘調査全体図 (1:500)



あ
い
う
え
お
か
き
く
け
こ
さ
し
す
せ
そ
た

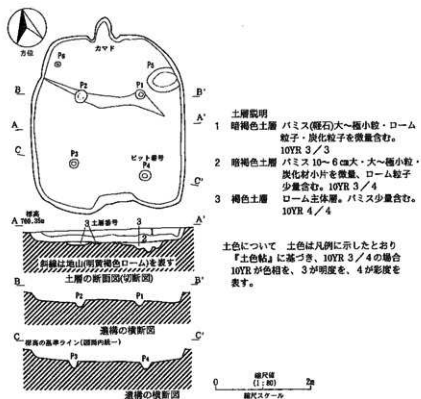
第6図 高砂町追跡II調査全体図 (1:400)

第三章 遺構と遺物

1 竪穴住居址

H 1 号住居址

H 1 号住居址は、調査区のほぼ中央、く・け-8 グリッド内に位置し、全体層序III層上面において検出された。

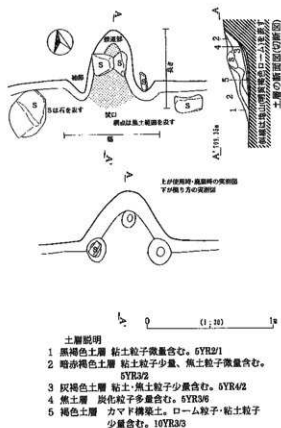


第7図 H 1 号住居址実測図

平面の形態は隅の丸い長方形で、規模は南北が355cm・東西は327cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より東へ12°ずれる。床の面積は9.77㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割された。床はおおむね平坦で、床面の所々で貼床が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体層序第III層の明黄褐色ロームを利用し、平滑

であるが軟弱であった。



第8図 H1号住居址カマド実測図

ピットは主柱穴4個(P₁~P₄)、貯蔵穴1個(P₅)、補助柱穴1個(P₆)の計6個が検出された。

カマドは住居址の北壁の中央で検出された。残存状況は悪く、左右の両袖と煙道天井に使用された石(溶結凝灰岩)2個が残るのみだった。規模は煙道出口から焚口までの全長が63cmで、袖部の幅が75cmを測る。また残存する右袖は長さ18cmで幅22cm、左袖は長さ19cmで幅25cmを測る。土層は全部で5層に分割され、この内第5層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、両袖ともに溶結凝灰岩を構築材として使用していた。なお袖石は残存していなかった。

遺物は、甕・環・皿といった、土師器、須恵器製の環、礫石・多孔石・石鏝などが出土した。また鬮香土器は土師器2点、須恵器1点の計3点が出土した。

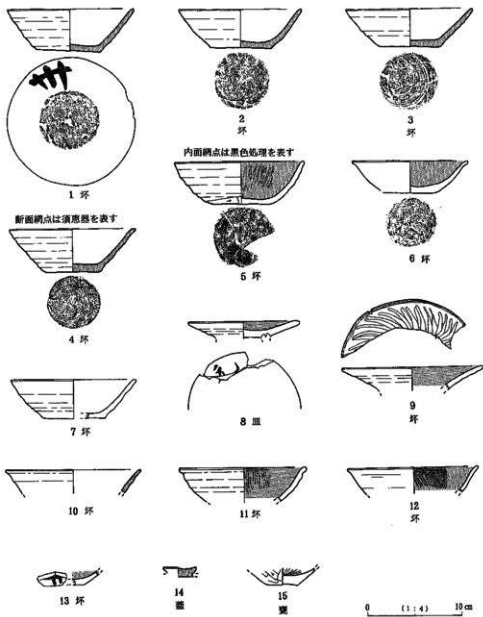
以上より本住居址は、平安時代の前期と考えられる。

・住居址平面図→15・16ページ

・遺物実測図→17～19ページ

・住居址写真→41・42ページ

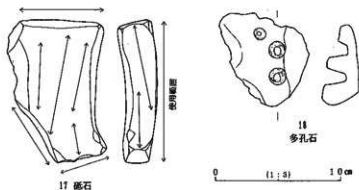
・遺物写真→45・46・49・50ページ



第9図 H1号住居址出土土器実測図

第2表 H1号住居址出土土器説明表

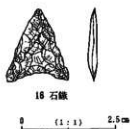
挿図番号	器種	外面の特徴	内面の特徴
9-1	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。墨書。	ロクロ横ナデ。
9-2	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。すす付着。	ロクロ横ナデ。すす付着。
9-3	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。炭化物・すす付着。	ロクロ横ナデ。すす付着。
9-4	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。すす付着。口縁部を中心に著しく歪む。	ロクロ横ナデ。
9-5	坏	ロクロ横ナデ。下縁部施削り。底部施削り。すす付着。	放射状施ミガキ。黒色処理。
9-6	坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。	施ミガキ。黒色処理。
9-7	坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。	不明。
9-8	皿	ロクロ横ナデ。台部欠損。墨書。	施ミガキ。黒色処理。
9-9	坏	ロクロ横ナデ。	放射状施ミガキ。黒色処理。
9-10	須恵器坏	ロクロ横ナデ。	ロクロ横ナデ。
9-11	坏	ロクロ横ナデ。	放射状施ミガキ。黒色処理。
9-12	坏	ロクロ横ナデ。	放射状施ミガキ。黒色処理。
9-13	坏	ロクロ横ナデ。墨書。	施ミガキ。黒色処理。
9-14	須恵器蓋	ロクロ成形。	ロクロ成形。
9-15	甕	施削り。智藏有り。	施ナデ。



第10図 H1号住居址出土土器実測図(1)

第3表 H1号住居址出土土器説明表(1)

挿図番号	器種	材質	特徴
10-17	磁石	砂岩	多面砥。
10-18	多孔石	軽石	孔部3ヶ所。



第11図 H1号住居址出土石器実測図(2)

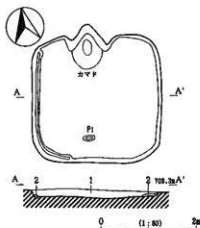
第4表 H1号住居址出土石器説明表(2)

押洞番号	器種	材質	特徴
11-16	石鏃	黒色緻密安山岩	凹基。

H2号住居址

H2号住居址は、調査区のほぼ中央南より、さー7・8グリッド内に位置し、全体層序Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が272cm・東西は273cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より東へ18°ずれる。床の面積は5.71㎡を測る。



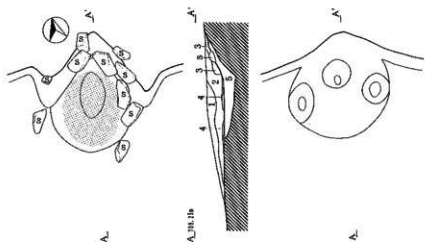
- 1 暗褐色土層 炭化材料・小片・バミス(礫石)大～極小粒・ロームを微量含む。10YR 3/3
- 2 褐色土層 ローム多量を含む。10YR 4/4

12図 H2号住居址実測図

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割された。床はおおむね平坦で、貼床は認められなかった。床は所々火熱を受け焼けており、床直上に炭化・焦土層が2cm以下で確認された。遺物も焼けたものが多く、本住居址は焼却あるいは焼失したものと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体層序第Ⅲ層の明黄褐色ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

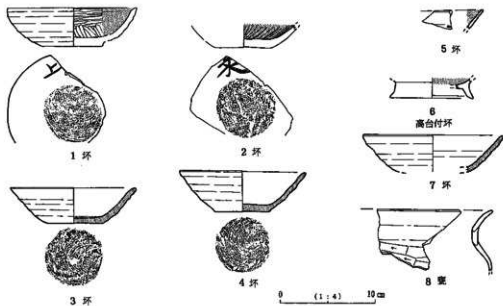
ピットは入口施設に伴うと考えられるピット1個(P₁)が検出されたのみである。

カマドは住居址の北壁の中央やや西寄りで検出された。残存状況は悪く、左右の両袖一部と構築材として使用された溶結凝灰岩が残るのみだった。規模は煙道出口から焚口までの全長が96cmで、袖部の幅が102cmを測る。また残存する右袖は長さ27cmで幅31cm、左袖は長さ32cmで幅32cmを



- 1 極暗赤褐色土層 粘土・焦土粒子微量含む。5YR2/3
- 2 暗赤褐色土層 粘土・粒子微量含む。5YR3/2
- 3 にぶい赤褐色土層 粘土粒子多量、焦土粒子少量含む。5YR4/4
- 4 焦土層 焦土主体。粘土粒子微量含む。5YR3/3
- 5 黒褐色土層 カマド構築土。粘土粒子多量含む。10YR3/2

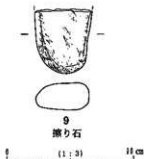
第13図 H2号住居址カマド実測図



第14図 H2号住居址出土土器実測図

第5表 H2号住居址出土土器説明表

押図番号	器種	外面の特徴	内面の特徴
14-1	環	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。すず付着。 墨書「上」。	荒ミガキ。黒色処理。
14-2	環	ロクロ横ナデ。底部回転糸きり。墨書「禾?」。 すず付着。	放射状荒ミガキ。黒色処理。
14-3	須恵器環	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。すず付着。	ロクロ横ナデ。すず付着。
14-4	須恵器環	ロクロ横ナデ。底部回転糸きり。すず付着。	ロクロ横ナデ。すず付着。
14-5	環	ロクロ横ナデ。墨書「不明」。	荒ミガキ。黒色処理。
14-6	高台付環	ロクロ横ナデ。すず付着。	環部荒ミガキ・黒色処理。台部すず付着。
14-7	須恵器環	ロクロ横ナデ。すず付着。H3と遠橋間接合。	ロクロ横ナデ。
14-8	甕	口縁から頸部横ナデ。胴部荒削り。	頸部「コ」の字。横ナデ。



第15図 H2号住居址出土石器実測図

第6表 H2号住居址出土石器説明表(2)

押図番号	器種	材質	特徴
15-9	すり石	輝石安山岩	端部を中心に使用擦痕。

測る。土層は全部で5層に分割され、この内第5層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、両袖ともに溶結凝灰岩を構築材として使用していた。

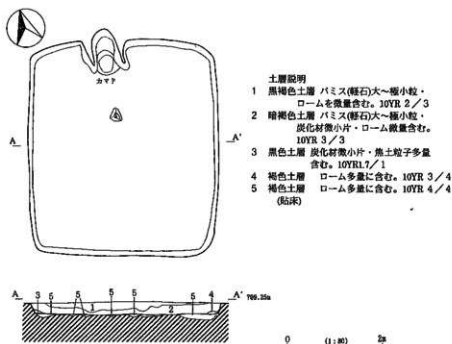
遺物は、甕・環といった土器、須恵器製の環、すり石などが出土した。また墨書土器は土師器環3点が出土した。第14図7番の須恵器環は、H3号住居址出土の破片と遠橋間接合した。

以上より本住居址は、平安時代の前期と考えられる。

- ・ 住居址平面図→19・20ページ
- ・ 遺物実測図→20・21ページ
- ・ 住居址写真→42ページ
- ・ 遺物写真→46・47・50ページ

H 3号住居址

H 3号住居址は、調査区のほぼ中央南端、し・す-5・6グリッド内に位置し、全体層序Ⅲ層上面において検出された。



第16図 H 3号住居址実測図

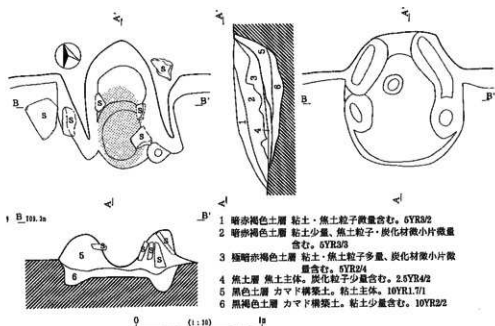
平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形で、規模は南北が457cm・東西は404cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より東へ20°ずれる。床の面積は15.55㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は4層に分割された。床はおおむね平坦で、床面の全面にわたり貼床(第5層)が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体層序第Ⅲ層の明黄褐色ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また床面は所々火熱を受け焼けており、床直上より3cm以下で焦土・炭化層が確認された。出土遺物も焼けたものが多く、本住居址は焼却あるいは焼失したものと考えられる。

ピットは検出されなかった。

カマドは住居址の北壁の中央やや西寄りで見出された。残存状況は悪く、左右の両袖が残るの

みだった。規模は煙道出口から焚口までの全長が101.5cmで、袖部の幅が92.5cmを測る。また残存する右袖は長さ63cmで幅27cm、左袖は長さ70.5cmで幅32cmを測る。土層は全部で6層に分割され、この内第5・6層は構築土である。袖は粘土と溶結凝灰岩によって構築されていた。なお袖石は残存していなかった。

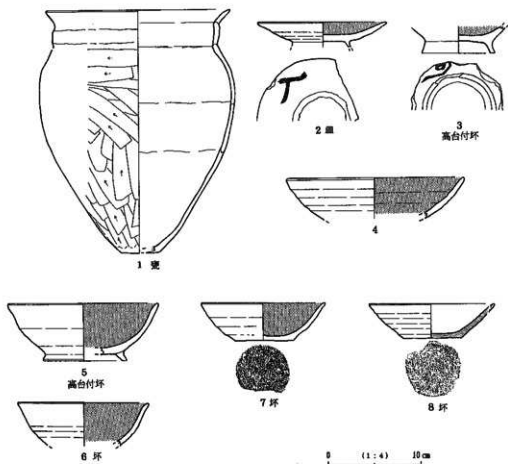


第17図 H3号住居址カマド実測図

第7表 H3号住居址出土土器説明表

検出番号	器種	外面の特徴	内面の特徴
18-1	甕	口縁・頸部横ナデ。胴部彫刻リ。	口縁・頸部横ナデ。胴部横ナデ。
18-2	皿	ロクロ横ナデ。すず付着。黒書「入」。	底ミガキ。黒色処理。
18-3	高台付坏	ロクロ横ナデ。すず付着。黒書「不明」。貼付け高台。	坏部放射状底ミガキ。黒色処理。
18-4	坏	ロクロ横ナデ。すず付着。	横位の底ミガキ。黒色処理。
18-5	高台付坏	ロクロ横ナデ。貼付け高台。すず付着。	横位の底ミガキ。黒色処理。
18-6	坏	ロクロ横ナデ。すず付着。	横位の底ミガキ。黒色処理。
18-7	坏	ロクロ横ナデ。すず付着。底部回転承切り。	底ミガキ。黒色処理。
18-8	須恵器坏	ロクロ横ナデ。すず付着。底部回転承切り。	ロクロ横ナデ。すず付着。

遺物は、甕・坏・皿といった土師器、須恵器製の坏などが出土した。また黒書土器は土師師の



第18図 H3号住居址出土土器実測図

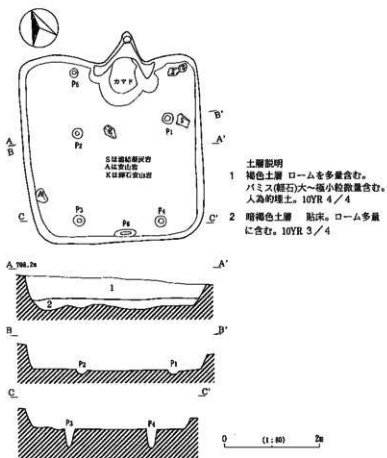
甕と環2点が出土した。

以上より本住居址は、平安時代の前期と考えられる。

- ・ 住居址平面図→22・23ページ
- ・ 遺物実測図→24ページ
- ・ 住居址写真→42ページ
- ・ 遺物写真→47・48ページ

H4号住居址

H4号住居址は、調査区の中央南端、セ・ソー11・12グリッド内に位置し、全体層序Ⅲ層上面において検出された。

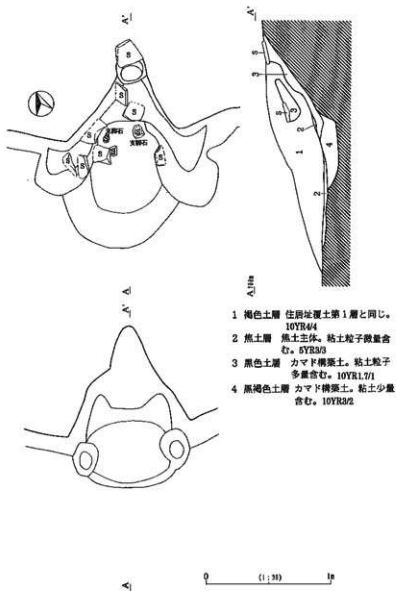


第19図 II 4号住居址実測図

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が393cm・東西は381cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より東へ20°ずれる。床の面積は12.17㎡を測る。

住居址の土層は2層に分割された。第1層は人為的な堆積層で、住居址の床まで一度で埋めていることがわかる。床はおおむね平坦で、床面の全面にわたり貼床(第2層)が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体層序第III層の明黄褐色ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。ピットは支柱穴4個(P₁～P₄)、補助柱穴1個(P₃)、入口施設に伴うと考えられるピット1個(P₆)の計6個が検出された。

カマドは住居址の北壁の中央やや東寄りで検出された。残存状況は良好で、焚口の天井部が破壊される他はほぼ完全であった。規模は煙道出口から焚口までの全長が166cmで、袖部の幅が147



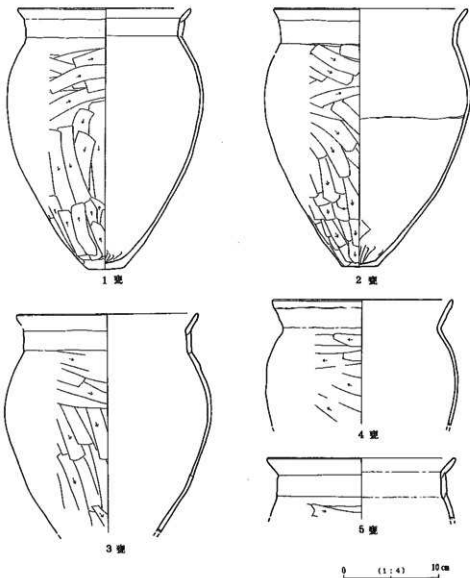
第20図 H4号住居址カマド実測図

cmを測る。また右袖は長さ78.5cmで幅48cm、左袖は長さ41cmで幅45cmを測る。土層は全部で4層に分割され、この内第3・4層は構築土である。袖・煙道天井部は粘土と溶結凝灰岩を中心に構築されていた。またかけ穴(燃烧部)には2本の支脚石が残存していた。

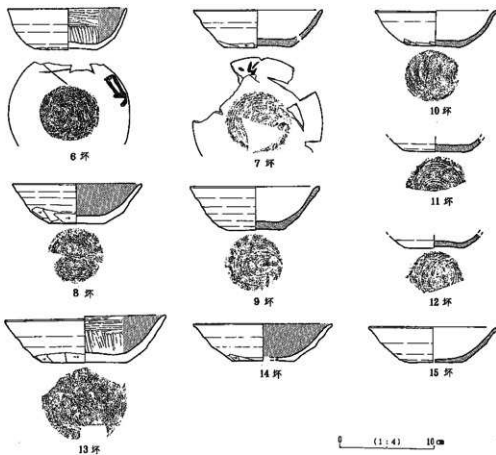
遺物は、甕・環といった土師器、須恵器製の環、白石、擦り石、^{まじろしんばら}高森神寶などが出土した。また土師器環・須恵器環2点の墨書土器が出土した。

以上より本住居址は、平安時代の前期と考えられる。

- ・ 住居址平面図→25・26ページ
- ・ 遺物実測図→27～30ページ
- ・ 住居址写真→43ページ
- ・ 遺物写真→48～50ページ



第21図 H4号住居址出土土器実測図(1)



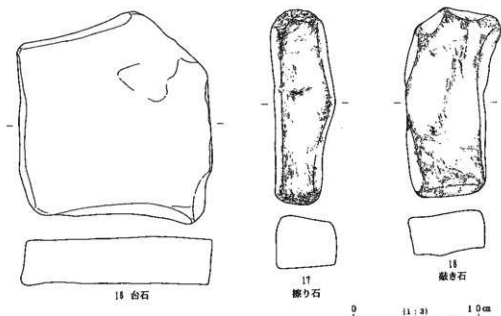
第22図 H4号住居址出土土器実測図(2)

第8表 H4号住居址出土土器説明表(1)

神図番号	器種	外面の特徴	内面の特徴
21-1	甕	口縁・頸部横ナテ。胴部寛削り。	口縁・頸部横ナテ。胴部寛ナテ。
21-2	甕	口縁・頸部横ナテ。胴部寛削り。	口縁・頸部横ナテ。胴部寛ナテ。
21-3	甕	口縁・頸部横ナテ。胴部寛削り。	口縁・頸部横ナテ。胴部寛ナテ。
21-4	甕	口縁・頸部横ナテ。胴部寛削り。	口縁・頸部横ナテ。胴部寛ナテ。
21-5	甕	口縁・頸部横ナテ。胴部寛削り。	口縁・頸部横ナテ。胴部寛ナテ。
22-6	環	ロクロ横ナテ。下部部寛削り。宛記号「×」。黒書「不明」。底部回転糸切り。	篋ミガキ。黒色処理。
22-7	須恵器環	ロクロ横ナテ。下部部寛削り。黒書「不明」。底部回転糸切り。	ロクロ横ナテ。

第9表 H4号住居址出土土器説明表(2)

標図番号	器種	外面の特徴	内面の特徴
22-8	坏	ロクロ横ナデ。下端部寛削り。底部回転彫削り。	横位の施ミガキ。黒色処理。
22-9	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。	ロクロ横ナデ。
22-10	須恵器坏	ロクロ横ナデ。下端部寛削り。底部回転糸切り。	ロクロ横ナデ。
22-11	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。	ロクロ横ナデ。
22-12	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。	ロクロ横ナデ。
22-13	坏	ロクロ横ナデ。下端部寛削り。底部寛削り。	施ミガキ。黒色処理。
22-14	須恵器坏	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。	ロクロ横ナデ。
22-15	坏	ロクロ横ナデ。下端部寛削り。底部回転糸切り。	横位の施ミガキ。黒色処理。



第23図 H4号住居址出土石器実測図

第10表 H4号住居址出土石器説明表

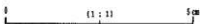
標図番号	器種	材質	特徴
23-16	台石	輝石安山岩	表裏2面使用。
23-17	すり石	安山岩	両端部使用。両端を中心に使用敲打痕・擦過痕。敲き石としても使用した可能性有り。
23-18	敲き石	輝石安山岩	両端部・近部を中心に使用擦過痕・敲打痕。



19

第11表 H4号住居址出土古銭説明表

所属番号	銭名	鋳造年
24-19	高壽神寶	818年(弘仁9年)より17年間。

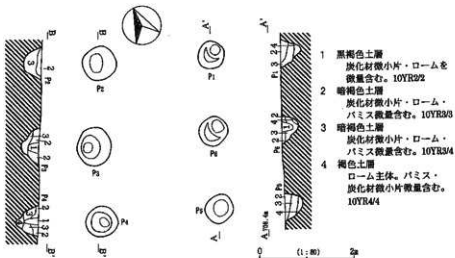


第24図 H4号住居址出土古銭拓影図

2 掘立柱建物址

F1号掘立柱建物址

F1号掘立柱建物址は、調査区の中央南側、し・すー12・13グリッド内に位置し、全体層序III



第25図 F1号掘立柱建物址実測図

層上面において検出された。本建物址は、F5号掘立柱建物址を破壊する。

本址は、2間×1間の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間は、 P_1-P_2 で252cm、 P_2-P_4 で341cm、 P_4-P_5 で245cm、 P_1-P_5 で336cmを測る。建物址の長軸方向は南北を指し、北より東へ 16.5° ずれる。

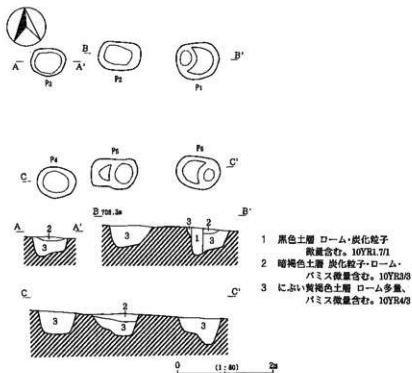
遺物は、平安時代の土器片が出土した。

本建物址の所産期は、平安時代と考えられる。

- ・ 建物址平面図→30ページ
- ・ 建物址写真→43ページ

F 2号掘立柱建物址

F 2号掘立柱建物址は、調査区の南東部、さ・し-14・15グリッド内に位置し、全体層序Ⅲ層



第26図 F 2号掘立柱建物址実測図

上面において検出された。

本址は、2間×1間の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間は、 P_1-P_2 で296cm、 P_2-P_4 で256cm、 P_4-P_5 で328cm、 P_1-P_5 で249cmを測る。建物址の長軸方向は東西を指し、東より

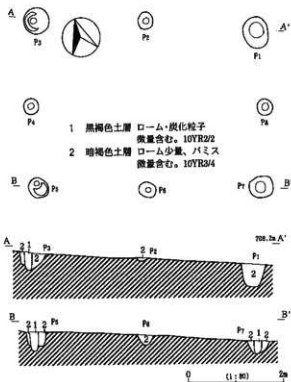
北へ1°ずれる。

遺物は、平安時代の土器片が出土した。

本建物址の所産期は、平安時代と考えられる。

- ・ 建物址平面図→31ページ
- ・ 建物址写真→43ページ

F 3号掘立柱建物址



第27図 F 3号掘立柱建物址実測図

F 3号掘立柱建物址は、調査区の南東部、し・す-13~15グリッド内に位置し、全体層序III層上面において検出された。

本址は、2間×2間の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間は、 $P_1 - P_3$ で475cm、 $P_3 - P_5$ で344cm、 $P_5 - P_7$ で476cm、 $P_1 - P_7$ で327cmを測る。建物址の長軸方向は東西を指し、東より北へ15°ずれる。

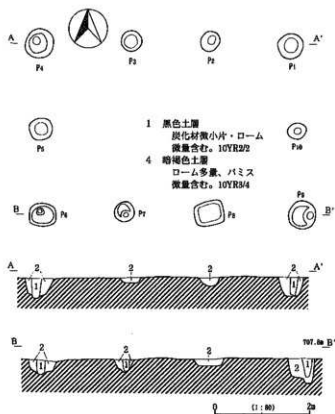
遺物は、平安時代の土器片が出土した。

本建物址の所産期は、平安時代と考えられる。

- ・ 建物址平面図→32ページ
- ・ 建物址写真→43ページ

F 4号掘立柱建物址

F 4号掘立柱建物址は、調査区の南東部、す・せ-16・17グリッド内に位置し、全体層序III層上面において検出された。



第28図 F 4号掘立柱建物址実測図

F 5号掘立柱建物址

F 5号掘立柱建物址は、調査区の南東部、し・すー14グリッド内に位置し、全体層序Ⅲ層上面において検出された。本建物址は、F 1号掘立柱建物址に破壊される。

本址は、2間×1間の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間は、 P_1-P_2 で245cm、 P_2-P_4 で322cm、 P_4-P_5 で254cm、 P_1-P_5 で321cmを測る。建物址の長軸方向は南北を指し、北より東へ 12° ずれる。

本建物址の所産期は、平安時代と考えられる。

- ・ 建物址平面図→34ページ
- ・ 建物址写真→44ページ

本址は、2間×3間の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間は、 P_1-P_4 で540cm、 P_4-P_6 で358cm、 P_6-P_9 で573cm、 P_1-P_9 で367cmを測る。建物址の長軸方向は東西を指し、東より南へ 1° ずれる。

遺物は、平安時代の土器片が出土した。

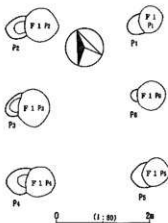
本建物址の所産期は、平安時代と考えられる。

建物址平面図→

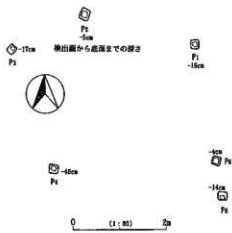
33ページ

建物址写真→

43ページ



第29図 F5号掘立柱建物址実測図



第30図 F6号掘立柱建物址実測図

F 6号掘立柱建物址

F 6号掘立柱建物址は、調査区の北東部、か・き-16・17グリッド内に位置し、全体層序III層上面において検出された。

主たる柱間は、 P_1-P_3 で386cm、 P_4-P_5 で364cm、 P_1-P_5 で331cm、を測る。

遺物は、中世の青磁片が出土した。

本建物址の所産期は、中世と考えられる。

- ・ 建物址平面図→34ページ
- ・ 建物址写真→44ページ

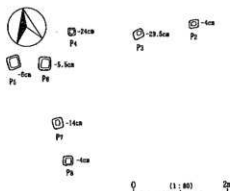
F 7号掘立柱建物址

F 7号掘立柱建物址は、調査区の北東部、く・け-18・19グリッド内に位置し、全体層序III層上面において検出された。

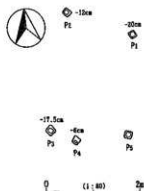
主たる柱間は、 P_1-P_4 で396cm、 P_5-P_8 で208cm、 P_8-P_9 で430cm、 P_1-P_9 で227cmを測る。

本建物址の所産期は、中世と考えられる。

- ・ 建物址平面図→35ページ
- ・ 建物址写真→44ページ



第31図 F7号獨立柱建物址実測図



第32図 F8号獨立柱建物址実測図

F 8号掘立柱建物址

F 8号掘立柱建物址は、調査区の北東部、か・き-19グリッド内に位置し、全体層序III層上面において検出された。

主たる柱間は、 $P_1 - P_5$ で321cm、 $P_2 - P_3$ で255cm、 $P_3 - P_5$ で166cmを測る。

本建物址の所産期は、中世と考えられる。

- ・ 建物址平面図→35ページ
- ・ 建物址写真→44ページ

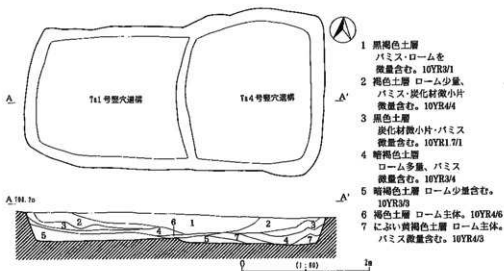
3 つちぐら 土倉状竪穴遺構

居住施設ではなく、穴倉とも呼ばれる地下倉庫を想定できる遺構で、建物址に併設された可能性のあるものに対してこの名称を使用した。

Ta 1号・Ta 4号土倉状竪穴遺構

Ta 1号・Ta 4号土倉状竪穴遺構は、調査区の北東部、き・く-18・19グリッド内に位置する。お互いに重複関係にあるが新旧は不明である。

Ta 1号の平面の形態は東西に長い隅の丸い長方形と考えられ、規模は南北が224cm・東西は現存で250cmを測る。Ta 4号の平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形と考えられ、規模は南北が



第33図 Ta 1号・Ta 4号土倉状堅穴遺構実測図

255cm・東西は現存で234cmを測る。Ta 1号の長軸方向は東西方向を指し、東より南へ2°ずれる。

Ta 4号の長軸方向は南北方向を指し、北より東へ1°ずれる。

検出面から床までの土層は7層に分割された。

以上より本遺構の所産期は、中世と推測される。

- ・ 平面図→36ページ
- ・ 写真→44ページ

Ta 2号土倉状堅穴遺構

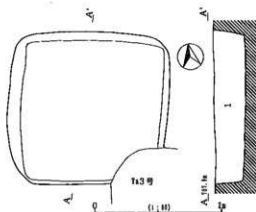
Ta 2号土倉状堅穴遺構は、調査区の北東部、き・く-20・21グリッド内に位置し、Ta 3号により南東部を破壊される。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が243cm・東西は256cmを測る。南北を主とした方位は、北より東へ8°ずれる。

検出面から床までの土層は1層のみが確認された。

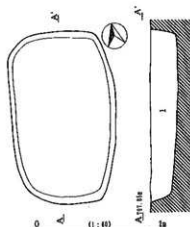
以上より本遺構の所産期は、中世と推測される。

- ・ 平面図→37ページ
- ・ 写真→44ページ



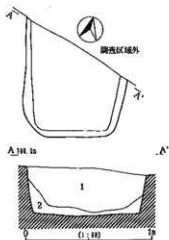
1 暗褐色土層 パミス・炭化粒子微量、
ローム少量含む。10YR3/4

第34図 Ta 2号土倉状竪穴遺構実測図



1 暗褐色土層 ローム・パミス・炭化材微小片
微量含む。10YR3/3

第35図 Ta 3号土倉状竪穴遺構実測図



1 暗褐色土層 ローム・パミス微量含む。
10YR3/3
2 暗褐色土層 ローム多量、パミス微量
含む。10YR3/4

第36図 Ta 5号土倉状竪穴遺構実測図

Ta 3号土倉状竪穴遺構

Ta 3号土倉状竪穴遺構は、調査区の北東部、き・く
-20・21グリッド内に位置し、Ta 2号を破壊する。

平面の形態は南北に長い隅の丸い不整形長方形で、規模
は南北が279cm・東西は169cmを測る。遺構の長軸方向は南
北方向を指し、北より東へ11°ずれる。

検出面から床までの土層は1層のみが確認された。

以上より本遺構の所産期は、中世と推測される。

- ・平面図→37ページ
- ・写真→44ページ

Ta 5号土倉状竪穴遺構

Ta 5号土倉状竪穴遺構は、調査区の北東部、か・き-20グリッド内に位置し、北側半分は調査
区域外へ展開する。

平面の形態は南北に長い隅の丸い不整形長方形と考えられ、規模は南北が現存で166cm・東西は

164cmを測る。

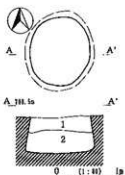
検出面から床までの土層は2層に分割された。

以上より本遺構の所産期は、中世と推測される。

・平面図→37ページ

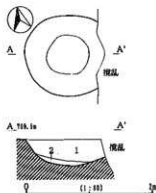
・写真→44ページ

4 土坑



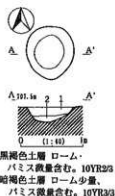
- 1 褐色土層 ロームを多量、パミス微量含む。7.5YR4/3
- 2 黒褐色土層 ローム多量、パミス微量含む。7.5YR3/2

第37図 D1号土坑実測図



- 1 黒褐色土層 ローム・パミス微量含む。7.5YR2/2
- 2 2にふい褐色土層 7.5YR5/4 ローム主体。

第38図 D2号土坑実測図



- 1 黒褐色土層 ローム・パミス微量含む。10YR2/3
- 2 暗褐色土層 ローム少量、パミス微量含む。10YR3/3

第39図 D4号土坑実測図

D 1号土坑

D 1号土坑は、調査区のほぼ中央、き・く-8グリッド内に位置する。

平面の形態は南北に長い楕円形で、規模は125cm×96cmを測る。

検出面から床までの土層は2層に分割された。遺物は須恵器製の甕・壺などが出土した。以上より本土坑の所産期は、平安時代の前半と考えられる。

・平面図→38ページ

写真→45ページ

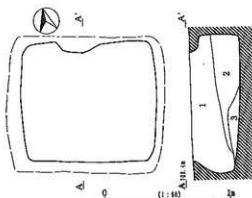
D 2号土坑

D 2号土坑は、調査区のほぼ中央、き・く-9グリッド内に位置し、西側を擾乱によって破壊される。平面の形態は東西にやや長い楕円形で、規模は127cm内外を測る。

検出面から床までの土層は2層に分割された。遺物は須恵器製の壺などが出土した。以上より

本土坑の所産期は、平安時代の前半と考えられる。

・平面図→38ページ 写真→45ページ



- 1 暗褐色土層 ローム少量、パミス微量含む。10YR3/3
- 2 におい褐色土層 ローム多量、パミス微量含む。
7.5YR5/3
- 3 におい橙色土層 ローム主体。7.5YR6/4

第40図 D3号土坑実測図

D 3号土坑

D 3号土坑は、調査区の北東部、き・くー16グリッド内に位置する。

平面の形態は東西に長い隅の丸い不整形方で、規模は南北が床面で214cm・東西は床面で251cmを測る。検出面から床までの土層は3層に分割された。

以上より本土坑の所産期は、中世と推測される。

・平面図→39ページ

・写真→45ページ

D 4号土坑



第41図 D4号土坑出土土器実測図

D 4号土坑は、調査区の南東部、す・せー16グリッド内に位置する。平面の形態は南北にやや長い楕円形で、規模は南北が83cm・東西は77cmを測る。検出面から床までの土層は2層に分割された。

遺物は須恵器製の環などが出土し、本土坑の所産期は奈良時代の後半と考えられる。

・平面図→38ページ

・写真→45ページ

第12表 D 4号土坑出土土器説明表

挿図番号	器種	外面の特徴	内面の特徴
41	須恵器環	ロクロ横ナデ。下端部鋸削り。底部鋸削り、中央部に宛記号「×」	ロクロ横ナデ

5 溝状遺構

M1号溝状遺構

M1号溝状遺構は、調査区の中央部、き～け-11・17グリッド内に位置し、全体層序Ⅲ層上面において検出された。

本遺構は東西方向に展開し、規模は、全長2230cm内外を測る。

本遺構の所産期は、中世以降と考えられる。

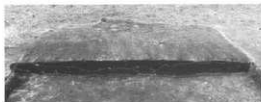
- ・ 平面図→13・14ページ



H 1号住居址土层断面(南↓)



H 2号住居址土层断面(南↓)



H 3号住居址土层断面(南↓)



H 4号住居址土层断面(南↓)



H 1号住居址出土状况(南↓)



H 2号住居址出土状况(南↓)



H 3号住居址出土状况(北↓)



H 1号住居址(西↓)



H1号住居址カマド検出状況(南より)



H1号住居址カマド振り方(南より)



H2号住居址(西より)



H2号住居址カマド検出状況(西より)



H2号住居址カマド振り方(南より)



H3号住居址(東より)



H3号住居址カマド検出状況(南より)



H3号住居址カマド振り方(南より)



H4号住居址(東より)



H4号住居址カマド検出状況(南より)



H4号住居址カマド検出状況(西より)



H4号住居址カマド掘り方(南より)



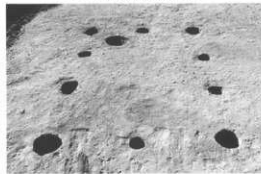
F1号掘立柱建物址(東より)



F2号掘立柱建物址(東より)



F3号掘立柱建物址(東より)



F4号掘立柱建物址(東より)



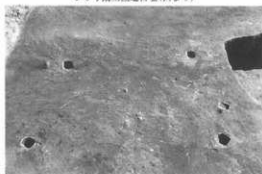
F5号孤立柱建物址(東より)



F6号孤立柱建物址(西より)



F7号孤立柱建物址(西より)



F8号孤立柱建物址(西より)



Ta2号土倉状罫穴遺構(東より)



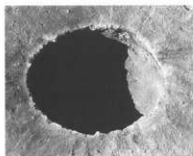
Ta5号土倉状罫穴遺構(西より)



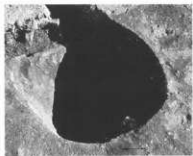
Ta1号・Ta4号土倉状罫穴遺構(西より)



Ta3号土倉状罫穴遺構(北より)



D1号土坑(東より)



D2号土坑(西より)



D3号土坑(東より)



D4号土坑(東より)



H1 9-1 坏(黑青)



H1 9-8 皿(黑青)



H1 9-1 坏(黑青)



H1 9-8 皿(黑青)



H1 9-3 坏



H1 9-4 坏



H1 9-2 坏



H1 9-5 坏



H1 9-7 坏



H1 9-6 坏



H2 14-1 坏(黑青)



H2 14-3 坏



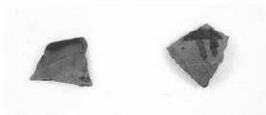
H2 14-1 坏(黑青)



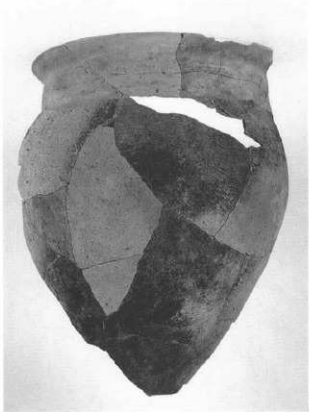
H2 14-2 坏(黑青)



H2 14-4 环



左上9 H2 14-5 环(黑青), H1 9-13 环(黑青)



H3 18-1 钵



H3 18-3 高台付环(黑青)



H3 18-3 高台付环(黑青)



H3 18-7 环



H3 18-2 皿(黑青)



H3 18-2 皿(黑青)



H3 18-8 环



H 3 18-5 环



H 4 22-13 环



H 4 21-1 甕



H 4 21-2 甕



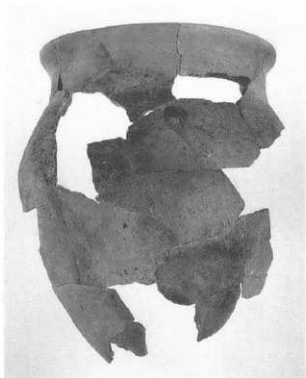
H 4 21-4 甕



H 4 22-8 环



H 4 22-10 环



H 4 21-3 鬲



H 4 22-6 环(黑书)



H 4 22-7 环(黑书)



H 4 22-9 环



H 4 21-5 鬲



D 4 环(第41组)



H 4 22-7 环(黑书)



H 1 10-17 砾石



H 1 10-18 多孔石



H1 11-16 石鏃1/1

左よりH2 14-9、H4 23-17、H4 23-18

H4 24-19 富壽神寶1/1



H4 23-16 台石



調査区西側近景 北より



調査区近景 北側中世遺構群 東より



調査区近景 南東部雁立柱建物址群 西より

佐久市埋蔵文化財調査報告書

- 第1集 『金井城跡』
第2集 『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第3集 『石附窟址III』
第4集 『大ふけ』
第5集 『立科F遺跡』
第6集 『上曾根遺跡』
第7集 『三貫畑遺跡』
第8集 『瀧の下遺跡』
第9集 『国道141号線関係遺跡』
第10集 『聖原遺跡II』
第11集 『赤塚垣外遺跡』
第12集 『若宮遺跡II』
第13集 『上高山遺跡II』
第14集 『栗毛坂遺跡』
第15集 『野馬久保遺跡』
第16集 『石並遺跡』
第17集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』(1-3月)
第18集 『西曾根遺跡』
第19集 『上芝宮遺跡』
第20集 『下聖端遺跡III』
第21集 『金井城跡III』
第22集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集 『南上中原・南下中原遺跡』
第24集 『上聖端遺跡』
第25集 『上久保田向IV』
第26集 『轟塚古墳群・轟塚II』
第27集 『上久保田向III』
第28集 『曾根新城V』
第29集 『山法師遺跡B・筒村遺跡B』
第30集 『市内遺跡発掘調査報告書1992』
第31集 『山法師遺跡A・筒村遺跡A』
第32集 『東ノ割』
第33集 『聖原遺跡Ⅷ・下曾根遺跡I・前轟部遺跡I』
第34集 『西一本柳遺跡I』
第35集 『市内遺跡発掘調査報告書1993』
第36集 『蛇塚B遺跡III』
第37集 『西一本柳遺跡II・中西ノ久保遺跡』
第38集 『南下中原遺跡II』
第39集 『中屋敷遺跡』
第40集 『寺畑遺跡』
第41集 『曾根新城I・II・III・IV・VI
上久保田向遺跡I・II・V・VI・VII
西曾根遺跡II・III』
第42集 『寄山』
第43集 『権現平遺跡』
第44集 『寺添遺跡』
第45集 『市内遺跡発掘調査報告書1994』
第46集 『濁り遺跡』
第47集 『上芝宮遺跡V』
第48集 『池端城跡』
第49集 『根々井芝宮遺跡』
第50集 『轟塚遺跡III』
第51集 『寺中遺跡・中屋敷遺跡II』
第52集 『呼の内遺跡』
第53集 『円正坊遺跡II』
第54集 『市内遺跡発掘調査報告書1995』
第55集 『番屋前遺跡』
第56集 『聖原遺跡X』

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第57集

高師町遺跡群 高師町遺跡II

1997年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒384-01 長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385 長野県佐久市大字志賀5953

Tel 0267-68-7321

印刷所 株式会社 櫻 (いっい)

